

自由意志

一

自由意志の問題といふのは、人生に於ける最も深い且つ重要な問題として、古來多くの人によつて論ぜられたに關はらず、今も尚依然として問題であると云ふの外ない。私は我々の自己と考へるものが如何なるものであり、如何なる世界に於てあるかを明にすることによつて、眞の自由とは如何なるものであり、如何にしてそれが可能なるかを論じて見ようと思ふ。

體なくして心といふものはなく、我々の意識現象が一々脳の皮質の刺戟に伴ふものとすれば、固より自由意志といふ如きもののあらう筈はない。縦、斯くまで唯物論的に考へずとも、我々の意志の決定といふものも、時間上に於ける出來事と考へられる以上、何等かの原因がなければならぬ、原因なくして何事も起らない。無から有は出ないといふ因果律が動かすべからざるものと考へられるかぎり、意志の自由といふ如きことは考へられない。縦、自己自身が行為の原因となると考へても自由意志と

300

いふものは考へられない、内的必然は自由ではない。スピノーザの哲學には何處にも意志の自由を容れる餘地がない。我々の自己といふものが何等かの意味に於て對象化せられるかぎり、自由意志といふ如きものは考へられない。要するに、自由意志といふ如きものは對象認識の立場の上に於ては認めることはできないのである。

併し我々は自由意志といふ如きことは單なる幻想に過ぎないとして考へ澄ますことができるであらうか。自由意志なくして當爲といふものの意味はない。我々の道徳的生活といふものがこの意志自由の事實に基いてその意義を有するのみならず、自由意志を否定するといふことは自己が自己自身を否定することを意味するであらう。自己と考へられるものは働くものでなければならぬ、而もそれは外から動かされるものではなくして、内から働くものでなければならぬ。内から働くと云つても、單に内的必然を以て働くといふのではなく、そこに自由の意味がなければならぬ。斯くして眞に自己といふものが考へられるのである。無論、自由意志といふものがなくとも對象的限定に沼うて單なる知的自己といふものを考へることもできるであらう。併しそれが單に綜合統一の認識主觀といふ如きものであつたならば、それは個人的自己といふものではない。而して個人的でない自己といふものは自己でない。之に反し内部知覺的自己といふ如きものを考へて見ても、それが内的事實の直覺と考へられるかぎり、そこに非合理的なるものがなければならぬ。而もその非合理的なるものは、外にあるので

なく、内にあると考へられねばならぬ。而して斯く考へられるかぎり、そこに自由の意義がなければならぬ。少くとも誤謬の可能といふ如きものがなかつたならば、自己といふ如きものは考へられないであらう。その根柢に於て自由の意義なくしては内部知覺的自己といふ如きものすら考へられないとすれば、絶対に自由意志を否定することは畢竟我々に直接なる事實の世界と考へるものをも否定することとなるであらう。而もコギト・エルゴ・スムといふ如く、私は私が有るといふことを疑ふことはできぬ。見る所、聞く所のものが夢であつても、夢みる私は夢ではない。私が有るといふことを疑ふならば、疑ふ私がなければならぬ。我々に直接なる事實の世界と考へるものは、かゝる意味に於けム自己に基礎付けられたものであり、因果律といふも、かゝる世界を統一する思惟の形式に過ぎない。無から有が出ないと云ふも、嚴密に斯く考へるならば、變化といふ如きものは考へられなくなるであらう。我々は我々の内的直覺の立場からは、自己といふものの有ること、そしてそれが自由であることを疑ふことはできない。併し内的直覺の立場から斯く考へられると共に、思惟の要求からは故なくして何事も起らないと考へざるを得ない。そこに解き難い自由意志問題の難點があるのである。私は先づ眞の自由意志とは如何なるものなるか、又如何にしてさういふものが考へられるかを明にして置かねば准らぬ。我々は如何なる場合、眞に自己を自由と考へるか。自由意志といへば、先づ任

302

意的意志といふものが考へられるでもあらう。自己といふものが、その置かれてある境遇及びその内的要求に關係なく、任意に自己自身を決定することが自由意志と考へられる。併しかゝる決定の意義に徹底すれば、それは自己の自由なる意志決定といふべきものでなく、却つて自己には單に偶然的なる出來事と考へる外ないであらう。我々の意志が自由であるといふのは、我々の意志が外から動かされないで内から自己自身を決定するといふことを意味せなければならぬ。そこに何等かの意味に於て自己といふものがなければならぬ。單に無意義なる任意的意志といふ如きものは、自己の意志とも考へられないものであらう。故に屢、内的必然が自由と考へられるのである。それで自由といふことは單に原因なくして結果があるといふ如きことではなくして、寧ろ一種の因果性とも考ふべきであらう。それは空間的・時間的に限定せられた個人的自己が、現實の瞬間に於て自己自身を決定する自己決定の仕方ではなければならぬ。我々の自己といふものが唯、現實に即してのみ考へられるかぎり、自由意志といふことも唯、現實に即してのみ考へられねばならぬ。現實を離れて自己といふものなく、自己のある所、そこが現實であり、現實と考へられる所、そこに自己があると云つてよい。自己が現實に於てあると考へられるかぎり、自己は何處までも因果的に働き、また何處までも因果的に限定せられるものでなければならぬ。併し斯く考へられるかぎり、自由意志といふ如きものは考へられない。外から動かされると考へる場合は言ふまでもなく、内から動かされると考へられるとしても、自由意

志といふものは考へられない、内的必然によつて動くものは自由ではない。然らば、自由意志の因果性の意義は何處にあるのであるか、如何なる意味に於て我々は自己の意志を自由と考へるか。私は自由意志といふことは、單に因果關係を越えることを意味するものでもなく、さらばと云つて無論所謂因果關係を意味するものでもないハ却つて因果關係の極限として自由意志といふものが考へられるのであると思ふのである。一般者の自己限定の極限として個物といふものが考へられるが、一般的なるものから出立して如何に種差を加へて行つても個物に達することはできない。逆に個物の自己限定が一般者を限定するといふことができる、ヘーゲルの如く個物が一般者と考へられる所以である。個物が一般を限定し、一般が個物を限定する、かゝる意味に於て具體的一般者の自己限定として到斷といふものが成立するのである。因果的關係に於ても斯く考へることができる。所謂因果律と自由とは互に相容れないものではなくして、その間に一般と個物との如き關係がなければならぬ。すべて空間的・時間的に有るものは、因果的に限定せられたものでなければならぬ。勝義に於て「有るもの」といふべき個物は、何處までも因果的に限定せられたものとして、因果的限定の極限として有るものでなければならぬ。而も所謂因果的限定を以てしては、何處までも個物的存在に達することはできぬ、かゝる意味に於て限定せられると考へられるかぎり、眞の個物的存在ではない。逆に所謂因果律と考へられるものは、個物が個物自身を限定することによつて限定せられるのである、事實が事實自身を

限定することによつて一般的なる因果の法則が立てられるのである。而して眞に唯一にして自己自身を限定する個物と考へられるものは、我々の自己の外にない。我々の自己と考へられるものの自己決定に於て右の如き意味がなければならぬ、所限定の極限として而も之を越ゆるといふ意味に於て、消極的自由の意義があり、而もすべての限定がそこに基き、そこから始まるといふ意味に於て、積極的自由の意義を有すると考へることができる。各の瞬間に於て事實が事實自身を限定すると考へられる所に、我々は自由意志を有つと考へるのである。時の限定に於て瞬間が達すべからざる極限點と考へられると共に、時は瞬間が瞬間自身を限定することから始まると考へられると一般である。

自由といふことは往々内的必然の意義に解せられる。併し縦、内的であつても、それが必然と考へられるかぎり、自由とは云はれない。合目的因果性に於ては後に現るべきものが始に含まれ、生物は内在的目的によつて動くと考へることができるであらう。併し生物は自由ではない、自由なるものは目的を知つて働くものでなければならぬ。我々の意志的作用は單に合目的的なのみではなく、目的を知つて働くものでなければならぬ。知つて働くといふ如きことは如何にして考へられるか。知るといふことを對象認識の意義に解すれば、知られたものは物であつて我ではない、何處まで反省し

ても、我々は我々自身の働きに達することはできない。併し働くといふことは如何なることを意味するか。働くものといふのは、時に於て變ずるものでなければならぬ、變ずるものと云ふものが考へら

れるには、そのヒポケーメノンとして變ぜざるものがなければならぬ。かゝるものが働くものと考へられるのである。併しそれが色とか音とか云ふ如き所謂一般概念と云つた如きものであつたならば、働くものといふことはできない。眞に働くものといふのは個物的なるものを限定するものでなければならぬ、各瞬間に於ける唯一の出來事を限定するものでなければならぬ。故に限定するものなきものの限定として、即ち無の一般者の限定として、働くものといふものが考へられると云ふことができ、働くものに於ては、個物が逆に抽象的一般者を限定すると云ふこともできる。斯くして働くものといふものが考へられると考へる時、そこに二つの見方があると思ふ。所謂一般者の自己限定の立場から見れば、働くものといふ如きものは何處までもその外になければならぬ。併し個物といへども一般者の限定として考へられるのであり、無の一般者の立場からは何處までもその自己限定として之に於てあると考へられねばならぬ。而して我々の知識といふものは、何等かの意味に於て一般者の自己限定と考へられるものであり、知るといふことを一般者の自己限定と考へれば、達することのできない個物的限定の行先が何處までも自己に於てあると考へることができ、斯く考へられる時、知つて働くといふものが考へられるのである。我々は自覺に於て自己が自己に於て自己を見ると考へるのである、知ることを知ると考へるのである。併し斯くして知つて働くといふことが考へられるとしても、知つて働くといふことは直に自由といふことではない。スピノーザの如く出來事の十全なる原因を知る時、

306
我々は能働的と考へれば、數學的知識の發展の如きものに於ても、我々は働くといふことができるであらう。併しかゝる非時間的なものに於て働きといふことは考へられないのみならず、そこには何等の自由もない。加之、藝術的創造作用といふ如きものを考へて見るならば、それは眞に内面的なる自發的作用といふことができるであらう。併しそこにも眞の自由はない。眞の自由といふものが考へられるには、やはり一面に任意 Willkür といふことがなければならぬ、自由意志といふのは選擇作用でなければならぬ。如何にして任意的なる選擇作用といふ如きものが考へられるか。一般者の自己限定の極限として個物といふものが考へられるが、逆に個物が個物自身を限定することによつて一般者の自己限定といふものが考へられると云ふことができる。判断は一方からは一般者の自己限定によつて成立すると考へられると共に、一方からは個物が個物自身を限定することによつて成立すると云ふことができる。個物が個物自身を限定すると考へられる時、個物と一般者との關係は如何に考ふべきであるか。所謂一般者の限定の立場からは、個物は達することのできない極限として、之を越え

たものでなければならぬ。かゝる關係に於て一般が個物を限定し個物が一般を限定するといふことは、限定せられた一般者が個物を包むべく、何處までも之を追ふといふ意味を有し、個物は一般者として自己自身を限定すると共に、何時も之を越えて自己自身を限定する意味を有つてゐなければならない。即ち無の一般者の限定に於ては、一般的なるものは法則の意義を有し、個物は一般的なるものを限定

307

する意義を有すると共に何處までも之を越えて自己自身を限定するもの、即ち誤るものの意味を有つてゐなければならない。單に一般者の自己限定の極限として考へられた個物は、自己自身を限定する個物ではない、動く個物ではない、即ち働くものではない。働くものは唯一なる個物として自己自身を限定すると共に、之を越えるものでなければならぬ、瞬間から瞬間に移り行くものでなければならない。斯く個物が個物的に自己自身を限定すると共に、之を越えると考へられる所に、個物が自己自身を限定すると共に一般的なるものを限定する意味を有し、逆に一般的なるものが當爲として何處までも個物を限定すべく、之を追ふといふ意味がなければならない。我々の自己は一面に當爲的主觀の意義を有すると共に、一面に何處までも之を破るものでなければならない、單に所謂個物的自己といふものもなければ、單に一般的自己といふものもない。我々の具體的な意識作用と考へられるものは、かゝる自己の作用として考へられるのである、即ち一面に規範的なると共に何處までも誤るものであう、迷ふものでなければならぬ。併し斯くして我々の意識作用と考へるものの誤るとか正しいとかいふことの可能性が説明せられたとしても、尚任意的なる選擇作用といふものは説明せられない、即ち思惟といふものが考へられるとしても意志といふものは考へられない。かゝるものが考へられるには我々は尚一層深く個物が個物自身を限定するといふ意味に徹底して見なければならぬ。個物が個物自身を限定するといふことは、動く個物となるといふことでなければならない、働くものとなると

308

いふことでなければならない、時の瞬間を限定するといふ意味を有たなければならない。而して自己自身を限定する一般者は之に對し何處までも當爲の意味を有たねばならぬ。併し自己自身を限定する個物即ち我々の自己と考へられるものが、一般的なるものの限定に沿うて、即ち對象的限定に沿うて、自己自身を限定すると考へられる時、思惟といふものが考へられるが、更に深く個物が個物自身を限定するといふ意味に於て、之を越えるといふことがなければならない、何處までも當爲を否定する意味がなければならない。然らざれば、尚限定せられた個物の意味を脱することはできない。時が瞬間から瞬間に移ると考へられる時、尚過去からの限定の意義を脱せない、現在が現在自身を限定することによつて時が限定せられるといふ意味がない。瞬間が瞬間自身を限定するといふ底には永遠の過去をも否定する意味がなければならない。かゝる意味に於て個物が個物自身を限定すると考へられる時、

そこに任意といふものがなければならない。併し斯く任意的となると云ふことは、單に我々が無頓着になるとか中和的になるとかいふことではない。さう考へられるならば、自己といふものはなくなるのである、個物といふものでもなくなるのである。そこに却つて最も深い意味に於て個物が個物自身を限定する意味がなければならぬ、唯一なるものが唯一なるもの自身を限定する意味がなければならない。(カントが宗教論の始に於て、根本悪として、ヴィルキュールそのものに先天的と考へて居る性癖 Hang の如きものでなければならない。) 動く個物といふのは個物から個物へ移るといふ意味を

309

有つてゐなければならぬ、瞬間から瞬間に移るといふ傾向を有つたものでなければならない。そこにすべての一般的なるものを否定すると共に、自己自身によつて一切を限定する意味がなければならない、それは神に背いて自己自身の世界を建設しようとするサタンの傲慢とも見られるであらう。個物が一般を限定し直ぐ逆に一般が個物を限定すると考へる時、連續的作用といふ如きものが考へられる。併し個物が一般的なるものに背いて自己自身の限定によつて一般的なるものを限定すると考へる時、欲求といふ如きものが考へられねばならぬ、時の各の瞬間が世界を限定する意味を有たねばならぬ、飛躍的統一の意味がなければならぬ。かゝる限定の極限に於て、一切を否定すると共に一切を肯定する自由意志といふものが考へられねばならぬ。我々は各の瞬間に於て絶對の無に接するのである、我々の自己限定とは無から無への飛躍でなければならぬ。それで、眞の自由意志とは單に任意的といふことではなくして、その底に個物が個物自身を限定する意味がなければならぬ、所謂個物を越えた個物の自己限定の意義でなければならぬ。限定するものなきものの限定といふのは、單に限定するものがないといふ意味ではない、單なる任意的限定と考へられるものは偶然と考へられる外ない。併し是に於て、我々是一種の矛盾に陥るであらう。何等かの意味に於て限定するものがあると云へば、自由は考へられない、限定するものがないと云へば、單なる偶然と考へる外はない。自己自身を限定する自由意志とは如何なるものであるか、人格的統一とは如何にして考へられるのであるか。我々の自

310

己といふものは現在が過去から限定せられるといふ過去からの統一に於て考へられるのでなく、寧ろ未來から現在が限定せられるといふ未來からの限定に於て考へられるのである、内部知覺的統一によつて考へられるのでなく、意志的統一によつて考へられるのである、我々の人格的連續は欲求の連續でなければならぬ。かゝる意志的統一とは何を意味するであらうか。それは個物が自己自身の底に於ていつでも絶對の無に觸れるといふことでなければならない。意志的統一とは死によつて生れるといふことであり、之を表から見れば無限の辯證法的運動であると共に、之を底から見れば我々は絶對の無の上に足踏みして居ると考へることができる。そこに我々の眞の人格的統一といふものがあるのであ

る。我々の意志とか行爲とかの底には、いつも永遠の今に接する意義があるのである。それで、我々が知つて働くことが自由と考へられても、知るといふことが對象的に知るといふことを意味するのではない。我々は自己の現在の行爲が何によつて限定せられるかを知らず、又私は次の瞬間に於て何を爲すかも知らない。かゝる意味に於て自己の行爲が知られると云ふならば、我々の自己は自由ではない。かういふ意味に於ては自己は絶対に不可知的といふの外はない。唯、現實の底に、すべてを消しすべてを始めると考へられるものに撞着する所に、唯一なるものの自己限定として、自由の意義があるのである。我々が絶対の無に接すると考へられる所に、我々に最も内的なるものに接すると考へられ、自己自身の行爲が唯一なるものの自己限定として創造と考へられるのである。眞に一度的なる事

311

實といふものは斯くして考へられるものでなければならぬ。従つて、我々はそこに絶対なるものに對して無限の義務を感じるのである。何となれば、かゝる個物に對する一般者は唯絶対の當爲でなければならぬのである。我々は唯一なるものとして神に接し、唯一なるものとして神に對し無限の義務を有するのである。

二

すべて實在的と考へられるものは、時の形式に當嵌つたものでなければならぬ、時間的なものが實在的と考へられるのである。併し時は現在が現在自身を限定すると云ふことから考へられ、現在が現在自身を限定する底には、我々の個人的自己といふものがなければならぬ。時は我々の個人的自己が自己自身を限定することによつて成立すると云ふことができる。自己のある所、そこが現在であり、現在のある所、そこに自己があるのである。而して我々の自己といふのは、唯、限定するものなきものの限定として考へられるのである、對象的に限定せられると考へられるかぎり、自己といふものはない。我々は自己限定の一步一步に於て、絶対の無に接すると考へられねばならぬ。そこにすべての過去が消されすべての未來が始まると考へられるものに觸れると考へられねばならぬ、そこに永遠の今の自己限定の意味がなければならぬ。かゝる意味に於て我々の自己は時を包むと考へることができ

312

るのである。かゝる考に於て「私が働く」といふことは何を意味するであらうか。時は無限の過去から無限の未來への直線的進行と考へられる。如何にしてかゝるものが考へられるのであるか。我々は個人的自己の自己限定の極限に於て、現在が現在自身を限定する瞬間的限定の尖端に於て、絶対の無に撞着すると考へられる。そこに絶対の無と考へられるものは、死の面と生の面との意味を有つてゐ

なければならぬ、我々の自己はそこで死することによつて生きるのである。之を一般者の自己限定の意味に於て云へば、我々は有の一般者の自己限定の極限として個物を考へることができる。併し眞の個物は斯くして考へられるのでなく、逆に無の一般者の自己限定として考へられるものでなければならぬ、少くとも有の一般者が無の一般者によつて裏附けられることによつて考へられるのである。そこに無の限定と考へられるものが二様の意味を有つて居るといふことができる。有の限定の立場からは、無の限定と考へられるものは無限に達することのできない系列でなければならない。之を逆に見れば絶対に不可知的なものの自己限定、即ち限定するものなきものの自己限定と考へることができる。過去から未來への無限なる時の流といふのは、かゝる考に基いて考へられるものである、即ち無によつて裏附けられ有の一般者の自己限定として考へられると云ふことができる。併しかゝる限定は固、個物が個物自身を限定するといふことによつて考へられるのでなければならない。かういふ意味に於ては、現在が現在自身を限定することによつて時が考へられると云ふことができる。前者の如く

313

考へるならば現在といふものは考へられない、而して現在のない時は眞の時ではない。個物といふのは固、何處までも限定せられたものでなければならぬ、限定せられない個物といふものはない。單に自己自身を限定すると云つても、個物といふものは考へられない。スピノーザの實體はカウザ・スイであつても、直ぐ個物とは云はれない。併し單に他によつて限定せられるものは亦個物ではない。個物は一々が絶対として自己自身を限定するものでなければならない。個物といふのは、かゝる矛盾の統一として考へられ、個物が自己自身を限定するといふことは否定即肯定たることを意味し、點より點に移る無限の過程と考へられるものでなければならぬ。之によつて瞬間から瞬間に移る時の系列といふものが考へられるのである。然るに、かゝる個物的限定といふものが考へられるにはそこに於て個物が消されると共に生ずるといふ揚所がなければならぬ、個物はかゝる場所に於てあるのである。時の限定について云へば、瞬間的限定の底に於てすべての過去が消され、すべての未來が始められると考へねばならぬ。永遠の今の自己限定として時が成立すおと考へることができる。かゝる立場から見れば、個物の自己限定といふべき時の限定の底には動かざるものがなければならぬ、今はいつも今である、そこに時が留まるといふことができる。即ち表から見て瞬間から瞬間へ無限に移り行くと考へられる時は、その底から見て永遠の今の一點を離れない、かゝる一點に於ける無限の足踏みと考へることができる。かゝる意味に於て自己自身が不變と考へられると共に(時間的に自己自身を限定する

314

ものが働くものと考へられるのである。併し斯く時の根柢にあつて自己自身を限定する永遠の今と考へられるものは、時の限定から見て二様の意味を有つて居ると考へることができる。一面に於てはそ

ここに時が消され、時が否定せられるといふ意味を有すると共に、一面に於て時がそこに生まれ、そこに包まれるといふ意味を有つて居なければならぬ、即ちそれは死の面であると共に、生の面でなければならぬ。時の根柢に否定面を置いて考へる時、過去から未來へ流れる無限なる直線的進行の時といふものが考へられ、その背後に働くものとして物の世界といふ如きものが考へられる。併しかゝる考に徹底すれば、時といふものは考へられず、従つて働くものといふものもなくなると云ふの外ない、絶対否定の面では何物もなくならねばならない。時は各瞬間に於て死することが生きることであるといふ辯證法的限定によつてのみ考へられるのである。眞に働くものと考へられるものは、かゝる限定の背後に考へられる我々の自己といふ如きものでなければならぬ。普通には物が働くといふことと自己が働くといふことを別々に考へられる様であるが、兩者の間には恰も一般と個物との間に於ける如き相互限定の關係がなければならぬ。一般的なるものの自己限定の極限に於て、個物が個物自身を限定すると考へられる、即ち物が自己自身を限定する、物が働くとき考へられる極限に於て、自己が働くとき考へられねばならぬ。個物の自己限定によつて一般者の自己限定といふものが考へられる如く、自己の自己限定によつて物の自己限定が考へられるのである、死の面が生面の面であるといふ意味に

315

於て物が働くとき考へられるのである(そこには少くとも時を包むといふ意味がなければならぬ)。物が働くといふには、唯一なる世界に於て唯一なるものが自己自身を限定する意味がなければならぬ。而してかゝる限定は唯、自己が自己自身を限定するといふことから考へられるのであり、斯く自己が自己自身を限定する所に、自覺的限定の意味があるのである。物の世界といふのは、唯かゝる限定に於て死の面に即して考へられたものに過ぎない。それで、單に限定するものなきものの限定として、過去より未來に亙る無限なる進行の時といふものが考へられたとしても、それによつて働くものといふものは考へられない。かゝるものが考へられるには、時の流と考へられるものに未來から過去に向つて流れるといふ意味がなければならぬ、過去から未來へ流れるものの逆流の意味がなければならぬ。唯、時を包むものの自己限定として、働くものといふものが考へられるのである。而して如何なる意味に於て死の面が生面の面と考へられるかに従つて、種々なる意味に於ての働くものと云ふものが考へられるのである。我々の自己が絶対無の自己限定として死することによつて生きると考へられる時、我々の自覺とは普通に考へられる如く、意識的に自己自身を限定するのではなく、身體的に自己自身を限定すると考へられねばならぬ、働くことによつて自覺するのである。我々が身體的に死の面に觸れると考へられる所そこに物の世界が考へられる、即ち我々は感覺的に物の世界に接すると考へられるのである。之を一般者の自己限定といふ立場から見れば、一般者の自己限定の極限として考

316

へられた極限點が、直に自己自身を限定すると云ふことを意味する、即ち個物の限定が一般者の限定と云ふことを意味するのである、死の面に沿うて我々の自己の自己限定が考へられるのである。カントの意識一般的自己とは此の如きものを意味するのであらう、感官を身體とした自己の自己限定といふべきであらう。かゝる自己の自己限定としての時は、連續的でなければならぬ。之に反し、生の面に觸れると考へられる所に於て、我々は行爲するものとして、そこに自由なる人格の世界が考へられる、カントの所謂實踐理性の世界の如きものが考へられるのである。個物は一般者を越えて自己自身を限定することによつて一般者を限定する意味を有し、一般者は何處までも之を限定しようとする當爲の意味を有つのである。そこに時を包むといふ意味があり、時は非連續の連續と考へられる。而して右の如き兩界の間に、死の面に接して而も生の面によつて裏附けられたものとして、合目的なる生物的世界といふものを考へることもできれば、生の面に接して而も尚、死の面によつて裏附けられたものとして、所謂意識の世界、心理學的世界といふ如きものをも考へることができる。一般者の自己限定として考へられる無限の系列が、その底に於て絶對無の自己限定面に如何なる意味に於て、如何に結び附くかによつて、即ち永遠の今の自己限定の意味によつて、種々なる意味に於ける働くものの世界が考へられるのである。

317

右の如くにして「私が働く」といふことが考へられ、永遠の今の自己限定面に於てすべての時が限定せられるとして、自由の世界が考へ得るとするも、我々は尚深くかゝる限定の根柢から考へて見なければならぬ。人格的統一を有つた我々の個人的自己といふものが考へられるかぎり、それはやはり何等かの意味に於て限定せられたものでなければならぬ。而もそれが如何なる意味に於て自由と云ひ得るか。時は永遠の今の自己限定として考へられるが、永遠の今の自己限定と考へられるものの底には、無の限定として自覺的限定といふものがなければならぬ。自覺的限定といふものが考へられるには、我々の人格的統一といふものが考へられねばならぬ。我々の人格的統一とは如何なるものであらうか。私は一つの人格といふものを考へるには、カントの所謂目的の王國といふ如き考から出立すべきであると思ふ。他を目的自體と認めることによつて自己が目的自體となる、即ち人格となるのである。而して私が私自身を一つの人格と認めるのも、かゝる限定によらねばならぬと思ふのである。私の一々の行動が或一般的なるものの限定として考へられることによつて、私の人格的統一といふものが考へられるのでなく、一々の瞬間に於て私が絶對自由として、他の瞬間に於ける私を絶對自由と見倣すことによつて、私の人格的統一といふものが成立するのである、即ち非連續の連續として人格的統一といふものが成立するのである。併し此の如き目的の王國の考は人格と人格との對立的關係を明にするものであるが、未だその結合の意義を明らかにしたものではない。かゝる關係に内容を與へ之をし

て現實的ならしめるものは何であるか。私はそこにキリスト教的愛、即ちアガペといふ如きものを考へたいと思ふ。汝の隣人を汝自身の如く愛せよといふキソスト教的愛は、絶対に分離せるものの結合でなければならぬ。我親なるが故に、我子なるが故に、愛するのではない、又我國人なるが故に愛するのでもない、否、何等の價値の爲に愛するのでもない、唯、人なるが故に愛するのである。そこに欲求といふ如きものとは正反對の意義があるのみならず、プラトンのエロスの如きイデヤに對する憧憬の如きものとも異なつた意味がなければならぬ。カントの考へた如く、義務と欲求とは正反對のものでなければならない。併し私といふものが單なる敬の對象として考へられるのではない。單なる敬の對象として考へられるものは自己の人格でなくして他人の人格でなければならぬ。然らばと云つて單なる欲求が自己でもない、單なる欲求の方向に於ては却つて自己が自己を失ふと考へられねばならない。唯、分離的なものの結合として人格的統一といふものが考へられるのである。眞の自愛は自敬であり、眞の自敬は自愛でなければならぬ。私の人格に於て愛即敬であり、敬即愛であるのである。目的の王國といふも、それが現實的意義を有するには、愛の結合によつて成るものでなければならぬ。然らざれば、社會といふ意義を有つこともできないであらう。社會といふものが人格的存在の意義を有するかぎり、その根柢に愛の結合がなければならぬ。社會心と考へられるものは、その結合の意義に於て自愛的と考へられ、その分離の意義に於て義務的と考へられるであらうが、それは一つの

ものの兩端でなければならぬ。併し人格といふものは斯くして考へられるとしても、私は尚欲求といふものに就いて考へて見なければならぬ。欲求なくして我といふものはないと考へられる、私の所謂愛の限定と欲求とは如何なる關係に於て立つであらうか。

私の愛の限定と考へるものは、絶対に分離せるものの統一でなければならぬ。故にそれは絶対に無なるものの自己限定と考へられるものでなければならぬ。我々の自己はかゝる限定によつて限定せられたものである。我々の自己は一步一步が絶対に自由にして、絶対に無に觸れると考へられると共に、死即生として一つの人格的統一と考へられるのである。かゝる限定は連續的過程として考へることはできぬ。それは點から點への飛躍的統一でなければならない、否、分離的統一でなければならない。私といふものは、單に一般者の自己限定としてその極限に到り、更に之を裏から限定するものとして考へられるのでなく、却つて我々の自己が自己自身を限定することによつて個物が限定せられるのである。自己自身を限定する個物、或は動く個物といふものが考へられるには、私が私自身を限定するといふことから考へられねばならぬ。私があるといふことがすべての事實的知識の根柢となるのである。而して私があると云ふことが考へられるには、右の如き愛の限定といふものが考へられねばなら

ぬ。自己といふものが愛といふ能力を有つと考ふべきでなく、愛は自己の存在形式でなければならぬ。無所住而生其心といふ如く我は無媒介的にあるのである、無媒介的に自己自身を限定するのである。
° 毒ひふ歟く我聡無媒厨的にあ るのである、無媒介的に官己自身を限定するのである。

320

自由なる人格としての自己は、單に世界によつて媒介せられてあるのではなく、世界は自己によつてあるのである。唯、私は汝に對するかぎり私であり、汝は私に對するかぎり汝である。私は汝の存在を知らない、併し私は汝の存在を認めるといふ意味に於てのみ存在するのである。而して我々の自己自身は點から點へ飛躍的限定によつて自己自身を限定するのである。それで、限定するものなくして自己自身を限定する我々の自己と考へられるものは、社會的に限定せられ而も非連續の連續として飛躍的に自己自身を限定すると考へられるが、かゝる限定は固、その根柢に於て一でなければならぬ。生れることが死することであり、死することが生れることであるといふ無の辯證法的限定に於て、或個人が絶對の無から生れるといふことは、又死して絶對の無に入るといふことを意味してゐなければならぬ。而して斯く或個人が絶對の無から生れ絶對の無に入るといふことは、又他人が絶對の無から生れ絶對の無に入るといふことを意味してゐなければならぬ、そこに社會的限定の意味がなければならぬ。唯、一人の人が絶對的なものとして、自己自身を限定するといふことは、有の限定であつて、無の限定を意味するものでない、従つてかゝる意味に於て眞の自由なる人格といふものは考へられない。アソストテレスがエネルゲーヤがデュナミスに先立ち、人は唯人から生れるといふが如きことも、瞬間が瞬間を生むと考へられる如く、無の限定といふ意味に於てのみ理解し得るのである(かゝる意味に於て社會的限定と考へられるものは、個入に對して一般的なるものの自己限定と考へられるであ

321

らう)。絶對に分離的なものの統一といふべき愛の限定として自己自身を限定する個人的自己は、その分離的獨立の立場に於て、何處までも他を自己となす意味を有つてゐなければならぬ、他を限定する意味を有つてゐなければならない。他に於て自己を見るといふ愛は、その分離的限定によつて措定せられる個人的自己の立場に於ては、斯く考へられねばならぬ。併し分離的限定の立場に於ては、自己と他との間には、絶對に越えることのできない間隙がなければならぬ。我々の個人的自己はかゝる限定の立場に於ては、越えることのできない障壁に撞着せざるを得ない。是に於て、我々は唯、愛の限定として他に従ふことによつて自己自身を見出すのである、死することによつて生きるのである。そこに、自己と一般者との關係があると云ひ得るであらう。個物が一般者を限定すると考へられると共に、一般者が個物を限定すると考へられる。而して個人的自己に對して、かゝる一般者は二様の意味を有つと云ふことができるであらう。それが絶對の否定面として、そこに我々が我々の自己を失ふ、

即ち我々が他となるといふ意味に於て、法則の世界といふものが考へられねばならぬ。之に反し我々が他に於て自己を見出すといふ意味に於ては、そこに當爲の世界といふ如きものが考へられねばならない。愛の相反する爾面の意義に従つて、我々の自己はかゝる爾界に属すると考へられるのである。愛の分離的限定によつて限定せられた個人的立場からは、斯く考へられねばならぬが、その底には愛の結合として個人から個人への飛躍的統一がなければならぬ。個人的自己が否定面に撞着して、而も

322

何處までも他を自己となさうといふ要求が我々に無限の欲求と考へられるものである。かゝる否定面によつて隔てられた立場に於ては我々は他の人をも物を通して見るのである。之に反し、我々が個人的自己の根柢に於て直に他に結合することが「見る」と考へられる即ち直観と考へられる。かゝる飛躍的過程がエロスと考へられるものである。併しエロスも眞の愛ではない。眞の愛は單に他を自己となし、自己が他となると云ふことなくして、對立する人格と人格との結合でなければならない、絶対に分離的なものの結合でなければならない、即ちアガペでなければならない。かゝるアガペの限定として、一方に無限の欲求を有ち一方に無限の義務を負ふ人格的自己といふものが考へられるのである。而してかゝる意味に於て愛の具體的限定として一つの人格的自己が限定せられるには、その中心に自己が自己自身を見るといふ意味がなければならぬ、即ちエロスの限定の意義がなければならぬ、それが眞の自愛と考へられるものである。個人的自己の自己限定の核として廣義に於ける感官といふ如きものがなければならぬ、それが我々に自己と考へられるものである、そして非合理的なるものの合理化の意味を有つのである。愛のノエマ的限定は見るといふことであると思へることができるのである、絶対に分離的なものの結合點が自愛的自己と考へられ、それは見るといふ意義を有するのである。それで、愛の限定として一つの飛躍的統一即ち非連續の連續といふ如きものが成立するかぎり、自己自身を愛するものとして個入的自己といふものが考へられ、個人的自己の根柢には、何處

323

までも他と飛躍的に結合する意義を有すると共に、又絶対に他なるものに撞着する意味がなければならぬ、そこに自愛的限定は無限の努力と考へられねばならない。前者を圓環的にして飛躍的と考へれば後者は直線的にして連續的と云ひ得るであらう。而も我々の個人的自己が撞着する否定面と考へられるものは、固、愛の否定面として我々を生むといふ意味を有つてゐなければならぬ。それは廣義に於て社會といふべきものである、一般的自己といふ如きものは斯くして考へられるのである。愛の分離的限定によつて限定せられたものと考へべき個人的自己は、その根柢に於て人から人への飛躍的結合の意義を有すると共に、一方に於て絶対の他に面して居ると云はねばならぬ、越ゆべからざる障壁に撞着して居るのである。此故に各の個人の立場に於て無限なる時の流といふものが考へら

れるのである、他と飛躍的に結合する意義を有しながら而も絶対の他によつて遮られる時、無限なる時の流といふ如きものが成立せねばならぬ。内部知覺的自己として單なる内的時、或は主觀的時といふものが考へられるであらう。併しそれは眞の時ではない。之に反し、自己が全然他から限定せられると考へられる時、又時といふ如きものは考へられない。眞の時と考へられるものは、我々個人的自己と考へられるものが絶対の障壁に撞着すると共に、之を越える意味を有つてゐなければならない。自己が他を自己としようとする無限なる自己限定の尖端に於て、之を越える意味がなければならぬ、他を自己となす意味がなければならぬ。人格的統一の立場に於て眞に現實的な時が考へられるので

324

ある。而して斯く自己限定の尖端から尖端に移るといふことが、瞬間から瞬間に移るものとして、働くといふ意味を有つて居るのである。個人的自己が自己自身を限定するた當つて、絶対に他なるものに撞着すると考へられるが、自己が一つの人格として之を越えるといふ意義を有するかぎり、他は單なる他ではなくして、自己が他によつて限定せられると共に、之を限定する意義を有し、之を媒介として何處までも絶対に他と考へられるもの?即ち他の人とも結合するといふ意味を有つたものでなければならない。そこに、我々の身體的限定といふものが考へられるのである。即ち愛の限定の立場からは、絶対に他と考へられるものは單なる物質の世界ではなくして、身體的と考へられるのである、合目的でなければならないのである。働くといふことは、かゝる意味に於て個物が個物に移り行くことである、自己自身を否定して他に移り行くことである。かゝる意味に於て個人的自己が自己自身を限定することが行爲と考へられるのである。愛の限定によつて限定せられた個人的自己と考へられるものは、行爲するものでなければならない。併し斯く考へられる時、個人的自己は自己自身の爲に自己を限定するのではなく、他の爲に自己自身を限定するといふ意味がなければならぬ、愛の限定として死すべく生れたものといふ意味がなければならぬ。そこに個人的自己が他から限定せられるといふ意味がなければならぬ。かゝる限定が廣義に於て當爲と考へられるものである。我々は普通に人と人との結合は唯、外的行爲によつてのみ可能であると考へて居る。併し言語とか文字とかいふものは單

325

なる物理現象に過ぎない。我々が互に理解し合ふのは、表現の世界に於てでなければならぬ、言語とか文字とかいふのは唯符徴の役目を演ずるまでである。かゝる世界に於ては我々の自己は直接に結合すると云ふこともできる。我々の意識内容と考へられるものは、却つて表現的内容の個別化せるものと考へることもできるのである。行爲に於ては尚、自己が他に移り行くと考へられる。併し表現に於ては自己が他となるのである、自己が自己自身を失ふのである、すべての他が自己となるのである。そこには我々は自己自身の身體といふものを失ふと共に、すべてのものが自己の身體の意味を有つの

である。かゝる限定が廣義に於てエロスのと考へられるものである。一般的自己といふ如きものは斯くして考へられるのである、而してかゝる限定の内容がイデア的といふことができるであらう、我々の行爲的自己はかゝる一般者から限定せられると考へられるのである。欲求的自己としては、我々に對して立つものが自然と考へられるが、行爲的自己としては、我々は一面に於て自然に對すると共に、一面に於て一般的自己に對して立つと考へることができるであらう。

分離的限定の極限として限定せられ、絶対に他なるものに對して立つと考ふべき個人的自己の立場から見れば、愛の限定は右の如く考へられるが、入格としての我々の自己の間には、直接に相對し、直接に相接するものがなければならない。かゝる立場に於ては、汝は私に對して汝であり、私は汝に對して私であるのである。右の如き個人的自己の立場から、行爲によつて他を自己となすといふ方向

326

を何處まで進んでも、遂に他人に達することはできない、何處までも個人的自己の擴大に過ぎない、従つて自己の存在に道德的意義がないモナドは世界を映しても一つの人格ではない。かゝる方向を否定する方向に於て、私と汝とが相接するのである、モナドとモナドとは互に自己自身を破ることによつて神に於て相見るのである。無論斯く云ふも、私は直接に汝の現實を知るといふのではない、他人の存在を知るには、行爲とか表現とかいふものを通すの外ないであらう。併し人は人から生れると考へられる如く、人格が人格を生むと考へざるを得ない。我々の人格は肉體的生命から生れるのではない、物から心は生れない。身體と考へられるものは、却つて無にして自己自身を限定すると考へられる自己に於て見られる非合理的なるものに過ぎない。一つの人格と人格とは絶対の無を隔てて相對するのである、絶対の死即生なるものが私と汝とを相結合するのである。その間に何等の物質的なものをも容れることはできない、又所謂一般的自己といふ如きものをも挿むことはできない(一般的自己といふ如きものは個人的自己から考へられたものに過ぎない)。他の個人といふものの限定なくして、私の個人といふものはない、汝なくして私といふものはない。個人と個人とは自覺的限定の尖端に於て直接に相觸れて居るのである、絶対に分離的なものの統一として社會的に結合して居るのである。私は人が人から生れるといふが、かゝる關係に於て一より他に移るといふことは唯、生れると云ふの外はない。瞬間から瞬間に移り行くと考へられる時といふものも、かゝる意味に於て生れると

327

考へられぬものでなければならぬ。而してかゝる意味に於て生れると考へられるかぎり、個人的自己の自己限定といふものが考へられ、それが自愛と考へられるものである。併しかゝる限定の底には、社會的なものがなければならぬ、空間的なものがなければならぬ。人格は各自獨立でなければならぬ、親も子の人格を生むことはできない、子も親も人格としては同等でなければならぬ、共に永

遠なるものに接して居るのである。かういふ意味に於ては人格は生れるものでない。時間的な自愛を愛のノエマ的限定と見るならば、空間的な他愛はそのノエシス的限定といふことができるであらう。個入的自己の自己限定の立場から自己自身を失ふと考へられる表現の世界の如きものが成立するのも之によるのである。一般的自己と考へられるものは、個入的自己が自己自身の限定を失ふと考へられる所に成立するのである。併しかゝる場合個人的自己が自己自身を失ふと考へられるのは、絶対に他なるものに面して立つと考へられる欲求的自己の立場から考へられる故であつて、人格的自己の立場に於ては、却つて個人的自己が個人的自己限定の尖端に於て直に個人的自己と接するのである、社會的限定によつて個人的自己が眞の個人的自己となるのである。欲求的自己の立場から自己が面して立つと考へられる障壁と考へられるものは、愛の立場からは固、社會的限定の意義を有つたものでなければならない。我々は表現を逼じて個人的自己が互に相了解すると考へるが、個人的自己がその、根柢に於て社會的なが故に、表現的に相了解すると考へ即ちれるのである。人格的自己に對して立つ

328

ものは單なる他ではなくして人格的でなければならぬ、越ゆべからざる障壁として立つものは自然ではなくして一般的自己といふ如きものでなければならない。個人的自己が}つの人格として、自然を破つて、個人的自己が個人的自己となると考へられると共に、一般的自己といふものが之に封立するのである。個人的自己と一般的自己との關係は、個物と一般との關係の如く相互的限定でなければならない。個人的自己は意志としては當爲に對して立つのである。欲求的自己に於ては、自己が他によつて否定せられ、自己が他を否定することによつて他を自己となすと考へられるが、意志的自己に於ては、自己が自己の内から自己を否定することによつて他となると共に、自己が眞の自己となるのである。一般的自己の自己限定と考へられるものは元來、耐會的でなければならない。かういふ立場から見れば、前に絶対の他に對して立つと考へられた欲求的自己といふものは、固、自己自身に對して立つたのであると考へることができる、物に對して立つたのでなく人に對して立つたのである。我々が自然に對すると考へる時、自然は尚打ち克ち得べきものでなければならぬ、單なる否定は眞の否定ではない。絶対に打即ち克ち得ざるものは、自己自身の非合理性でなければならぬ、自己の存在そのものの矛盾でなければならぬ。自己自身の矛盾といふことは、我々が生れることが死することであり、死することが生れるといふことである、絶対に他なるものと一であるといふことでなければならぬ。自然の非合理性と考へられるものは、その實、我々の自己自身の非合理性に外ならない。眞に他とい

329

ふべきものは、物ではなくて人でなければならない。我々は自己自身の中に非合理的なるものを抱いて居るのである。眞に我々の身體といふべきものは此の如きものでなければならない、即ち根本惡と

いふ如きものでなければならない。欲求的自己が意志的となつた時、身體を離れるのではなく、却つてそこに眞の身體を有つのである(眞の身體は歴史的事實であるのである)。それで、行爲によつて他を自己となすと考へられる個人的自己の自己限定の底には、人から人への飛躍的統一がなければならぬ。我々が自己自身の底に横たはる非合理的なるものを越えて、即ち自己否定を否定して、他と結合するのが行爲と考へられるものである。行爲の底には人と人とを限定する私の所謂社會的限定といふものがあり、欲求的自己の立場に於ては、我々の行爲は絶対に越ゆべからざる他によつて限定せられると考へられると共に、人格的自己の立場からは、何處までも非合理的なるものを自己自身の内に包むといふ意味に於て、自由と考へられねばならぬ。人格としての我はいつも絶対に他なるものを内に含むといふ意味を有つてゐなければならない。

私と汝とが社會的限定に於て直接に相接するといふ意味について、此に一言して置きたいと思ふ。私は汝が何を思ひ何を欲す、るかを知らず、汝は私が何を思ひ何を欲するかを知らない。客観的には、私と汝とを包む何等の一般者をも限定することはできない、私と汝とを外から限定する何者もない。かういふ意味に於ては私と汝とは絶対に相異なれるものである、私と物との間に連絡は考へられても、私と汝との間の連絡は考へられない、互に自由なる人格である。併し私は汝の人格を認めることによつて私である、私が私として一の人格であるには、汝が汝でなければならぬ、私の存在には汝が假定せられねばならぬ。私は汝を認

330

めることによつて物を離れて自由なる人格となるのである。唯、一つの人格といふものはない、かゝるものを考へるのは人格がないと云ふに等しい。平面上の一點は立體上の一點を認めることによつて立體の點となるのである。かういふ意味に於ては私と汝とは内面的に結び附けられて居るといふことができる。絶対に異なるが故に、直接に相接するのである。若し兩者を包む類概念の如きものがあるとすれば、直接に相接するとは云はれない。私と汝との間に矛盾的統一の意義がなければならぬ。物は我に對して單なる他である、我と物と相對する時、我は對象化せられて居るのである。そこに尚一種の類概念の限定を考へ得るであらう。私と汝とは絶対に分離的なものの結合として、その間に辯證法的關係が考へられるのみである。兩者を包む類概念はない、唯限定するものなきものの限定として個物から個物に移ると云はねばならぬ。私と汝とはかゝる意味に於て直接に内面的に相接するのである。併しかゝることを云へば、自己の人格的統一と他人の人格的統一との對立は何處から出て來るかと云はれるであらう。かゝる問題は尚稿を改めて論ぜなければならぬ。併し一つの人格は他の人格から生れないといふ無の限定の意義から人と人との對立的關係が成立せねばならぬ。社會的限定のノエシス的方向には人と人との間に永遠の對立が見られなければならない。永遠の今の自己限定として、今の限定の底には空間的なものがあるのである。

時は自覺的限定によつて成立し、自覺的限定と考へられるものは分離的なものの統一として、愛の限定に墓くとするならば、我々の實在界と考へるものは、その根抵に於て人格的といふべく、我々に直接なる具體的世界といふべきものは歴史的といふことができるであらう。我々の個人的自己は歴

331

史的事物としてかゝる世界に於て生死するのである。我々の個人的自己と考へるものは、如何なる意味に於て他を限定し、如何なる意味に於て他から限定せられるか、即ち我々は如何なる意味に於て眞に自由と考ふべきであるか。私は是に於て個物といふものに就いて考へて見なければならぬ、眞の個物と考へられるものは自己自身を限定するものでなければならぬ、他より限定せられるものは個物ではない。單に一般者の自己限定の極限として考へられる個物は、限定せられた個物であつて、自己自身を限定する個物ではない。眞の個物はかゝる一般者を限定するものでなければならぬ、一般者の限定の極限として考へられる限定せられた個物を限定する意味を有つたものでなければならぬ、點から點への飛躍的限定の意味を有つたものでなければならない。眞の個物といふべきものは、單に一般者の自己限定に於てその逆限定として考へられるのでなべ、之を越えて自己自身を限定する意味を有つてゐなければならぬ。然らざれば、個物の獨立性といふものは考へられない、個物は動く個物でなければならぬ。かゝる意味に於て個物的なる時といふものが考へられ、又動くものとか、働くものとかいふものが考へられるのである。而してかういふ意味に於て眞に個物的といふべきものは、我々の個人的自己といふものであらう。個物が個物自身を限定するといふことは、固、所謂一般者の自己限定

として考へられるのでなく、我々の自己が自己自身を限定するといふことから考へられるのである。自己が自己自身を限定する所、そこがいつでも「此」として、そこからすべての物が考へられるのである。現在が現在自身を限定すると考へられる時の限定といふ如きものも、かゝる自覺的限定によつ

332

て考へられねばならないのである。併し個物といふものは單に自己自身を限定するといふだけのものでない、又他から限定せられるといふ意味を有つたものでなければならない。プラトンがパルメニデスに於て論じて居る様に、單に「一」といふものはない、スピノーザの實體といふ如きものでも個物とは考へられない。個物と考へられるものは、何處までも限定せられたものでなければならない。一般者の限定の極限として、個物といふものが考へられると考へられる所以である。而も限定せられた一般者の限定としては、何處までも個物といふものは考へられない。眞の個物といふべき我々の個人的自己を限定する限定原理とは如何なるものであらうか。我々の自己は不生不滅なるものではない。不生不滅なるものは單なる理性といふ如きものであつて、自己ではない。我々の自己は生れるもの死

するものでなければならない。すべて歴史的事物と考へられるものは生滅でなければならない。我々の自己を生むものは何であるか。我々は何處より生れ來り何處へ死し去るのであるか。我々の人格的自己は單なる物質から生れるのでもなければ、單なる理性から生れるのでもない。人が人を生むと考へられる如く、個物が個物を生み、個物は唯個物から生れるのである、人格が人格を生むといふの外ない。生むとか生れるとかいふことは、固、個物から個物が出るといふことでなければならない。生命と考へられるものは個物の連續でなければならない、非連續の連續でなければならない。絶対に分離的なものの統一として愛の自己限定と考へられるものは、生むといふことでなければならない。

333

私の所謂絶対無といふものには内的生命の意義がなければならない。我々の生命といふものが因果的に限定せられたものと考へられる場合、そこに眞の生命といふものはない。所謂生物學的生命と考へられるものは人格的生命の反映に過ぎない、自然より生命は出て來ないのである。而して生命といふものを斯く考へて見るならば、生命の連續に於ては、いつも生れたものが生んだものと同等といふ意義を有つてゐなければならない。親は子を生むが、生れた子は親と同等でなければならない。そこに生命の永遠性がなければならない、人格は生れないと云ふこともできる、親も子の人格を生むのではない。人格の底には社會的限定といふものがなければならない、「目的の王國」の一員として人格といふものが考へられるのである。かういふ立場からは人格は一般者の外延といふ如き意味に於て、並立的に限定せられると云ふことができる。我々の個人的人格は、いつでも一般者から限定せられて居ると云ふことができる。永遠の今の自己限定として無數の時が限定せられると考へられる如く、絶対の愛の限定として無數の人格が限定せられるのである(我々の個人的自己は自己自身を限定すべく生れるのである、自己自身の運命を負うて生れるのである)。絶対的なものが自己自身を限定すると考へられる場合、そこに無限の過程といふものが考へられねばならぬ。限定せられたものは絶対でなく、無限定的なるものも絶対でない。而もかゝる無限の過程が一つの統一的過程として考へられた時、既に限定せられたものたるを免れない。眞に絶対なるものの自己限定と考へられるものは、無にして自

334

己自身を限定する意味を有つたものでなければならない。而してそれは無限の生死といふことでなければならない。絶対に分離的なものの統一として、限定するものなきものの限定の形式、即ち非連續の連續と考へられるものが我々の時と考へるものであり、我々の個人的自己は時に於て死すべく生れ、生るべく死するのである。時が各の瞬間に於て、すべての時が消され、すべての時が始まると考へられる永遠の今に接すると考へられる如く、我々は目的の王國の一員として、いつでも不生不滅なる永遠の生命に觸れると考へられると共に、絶対に無なるものの限定として我々は無限の生滅でなけ

ればならぬ。我々は永遠の生命の内容を充すべく生れると云ふことができる。「シムボジョーン」に於てディオティマの云ふ如く、我々人間には、愛によつて生むといふ所に、永遠不滅の意味があるのである。

個物は何處までも自己自身を限定するものでなければならぬ。而も單にかゝるものは個物ではない。個物は個物に對することによつて個物であるのである、人は人に對することによつて人であるのである。個物は個物を限定する一般者によつて限定せられたものでなければならぬ、私と汝とは目的の王國といふ如きものに於て限定せられたものでなければならぬ。私を限定する原理は直に汝を限定する原理でなければならぬ。かゝる意味に於て個物を限定するものがノエマ的には永遠の今と考へら

335

れ、ノエシス的には内的生命と考へられるものであらう。かういふ立場から、我々はいつも或一般者の限定として、一つの世界に於て生れると考へられるのである。すべての時を包みすべての時を限定すると考へられる永遠の今の自己限定の意味に於て、無限の過去から無限の未來へ互る時の流といふものが考へられる如く、我々は永遠なる生命の流の中に生れ、又その中に死に行くと考へられるのである。かゝる流が歴史的世界と考へられるものである。永遠の今の自己限定と考へられるものを、自覺的と考へるならば、それは歴史的主觀と考ふべきものであらう。我々はかゝる世界に於て、自己自身の使命を果すべく、それぞれの運命を有つて生れるのである。我々の自己は單なる物質の世界から生れるのでもなく、單なる精神の世界から生れるのでもない、歴史的に限定せられ、歴史的世界に於て生れるのである。斯く云へば、個人的自己の自由といふ如きものは考へられないと考へられるでもあらう。併し歴史的世界は固、有の限定として考へられるものではなく、無の限定として考へられるものでなければならぬ、限定するものなきものの限定として考へられるものでなければならぬ。歴史が我々を限定するといふのは、自然が物を限定する如く因果的必然によつて限定するのではない。我々は我々の使命を果すべく歴史に於て生れるのである。歴史によつて我々に與へられるものは、解くべく與へられる課題の如きものでなければならぬ。我々は何物もなき所に生れるのではない、與へられた境遇に、與へられた性格を有つて生まれるのである。かゝる限定の意義なくして個人といふも

336

のではない。併し我々の自己は永遠の今の限定として、何時もすべての過去を消し、すべての未來を始める意義を有つてゐなければならぬ。運命と考へられるものは、過去から必然的に我々の行動を支配すべく與へられたものと考へられると共に、いつも未來に於て解くべく與へられた課題の意味を有つたものでなければならぬ。所謂歴史といふものを永遠の今のノエマ的限定によつて考へられぬと

すれば、個人的自己といふものはそのノエシスの限定によつて之に於てあるものとして考へられると云ふことができるであらう。歴史は個人と社會との辯證法的限定によつて動き行くのである。

人格的なものを限定する絶対無の限定と考へられるものは、一面に於て無限の生死であると共に、一面に於ては並立的なるものを限定する意味を有つて居ると考へることができる、即ち社會的限定の意義を有つて居るといふことができる。前者は時の限定と考へられるものであう、後者は愛の限定と考へられるものである。並立的なるものを限定するといふ外延的限定の意義に於ては、個物的なるものを否定し之を内に消す、即ち一般化するといふ意味を有つて居ると共に、之を内に肯定し之を包むといふ意味を有つてゐなければならぬ。故に社會的限定と考へられるものは、個物的なるものに對して死の面たると共に、生の面であるといふ意義を有つて居る。すべてが消されると考へられる方向に於て、永遠の死の世界として自然界といふ如きものが考へられ、すべてが生かされ包まれると考へられる方向に於て、永遠の生の世界といふものが考へられる。人格的自己の立場からは、前者は悪の世

337

界、後者は善の世界とも考へられるであらう。時が過去から始まり過去から限定せられると考へられる如く、我々の自己は死の世界から生れると考へられる、即ち我々は自然から生れると考へられる。一度的と考へられる自己矛盾的なるものの自己限定はいつも斯く考へられるのである。生れるものは絶対に他なるものから生れねばならない、生れるものは生れる自由を有たない。併し時が永遠の今の自己限定として、現在が現在自身を限定するといふことから考へられる如く、絶対の愛の限定として生れる我々の人格的自己には、永遠の意味がなければならぬ、生れて生れない意味がなければならぬ、過去の過去から與へられるものも課題として與へられるといふ意味がなければならぬ。辯證法的に自己自身を限定すると考ふべき我々の自己に與へられるもの、即ち歴更的質料とも云ふべきものは、いつも課題の意義を有つたものでなければならぬ。自然といふ如きものでも我々に欲求の對象として與へられるのである。上に云つた如く、愛の分離的限定によつて限定せられると考へられる個人的自己の底に、無限の欲求といふものがなければならぬ。我々の欲求は所謂自然から生れるのではなくして人格的生命から生れるのである、何處までも他を自己となす意味を有つたものである。我々の自己はいつもかゝる意味に於て與へられたものを、自己に於て之を解くことによつて、永遠の生命に参加する意味を有つて居るのである。故に「汝は爲さざるべからず、故に爲し能ふ」とも云ひ得るのである。併し我々が永遠の生命に参加するといふことは、單に合理的となるとか、一般的となるとかいふ

338

ことを意味するのではない、我々が唯一なる人格として歴史的使命を果すことでなければならぬ、歴史的に限定せられた唯一なる自己として自己自身を限定することである。そこに眞の當爲といふも

があるのである。斯く云へば、我々が單に歴史的なるものに於て自己自身の目的を見る、即ち所謂客觀的精神として働くことが自由と考へられるかも知れぬが、爾考へられるならば、我々の個人的自己が個物として自己自身を限定する意味はない、我々は自己自身の底に永遠の生命に參與すると考へられない。例へば、一つの有機體といふものを考へて見るならば、その一々の細胞は全生命の意義を含むものとして、個物的なる細胞の生命は全有機體の生命であり、全有機體の生命は同時に個物的細胞の生命であると云ひ得るであらう。併しかゝる細胞は自由とは云はれない。我々の人格と考へられるものは、一々が絶對の意義を有つてゐなければならない、人格的限定と考へられるものは、非連續の連續といふ如きものでなければならない、一々の人格的自己は直接に絶對に觸れて居るのである。故にイデヤ的なものの内容は直覺的に見られるのである、飛躍的に與へられるのである。イデヤは歴史的に準備せられねばならぬ。併しイデヤは歴史的に見られるのではない、新しいイデヤは天才の直覺に俟たねばならぬ、我々はイデヤ的に歴史を構成して行くのである。我々は唯、行爲によつてのみイデヤを見ることができると云ひ得るであらう。併し行爲によつてイデヤを見るといふのは、既に與へられた自己の内容から連續的に見られるのでなくして、飛躍的に見ることを意味して居るのであ

340

る。行爲的自己として我々は、一方に與へられた一般者の自己限定の極限と考へられると共に、一方に飛躍的にイデヤを見るといふ意味を有つてゐなければならない、イデヤ的に自己自身を限定して行くと考へられねばならぬ。時間的にして而も時を越えて居る所に、我々の自由といふものが考へられるのである。時間的なものと空間的なものは何處までも結び付かない、而もかゝる結合として我々の人格的自己といふものが考へられるのである。永遠の今の限定として空間的と考へられる我々の自己は、自己の内に無數の時間的限定の方向を含んで居ると考へることができる。限定するものなきものの限定として、我々の自己の欲求の底には、いつも無限の不安があるのである。我々は自由であると共に、迷ふものであり、戦慄くものでなければならない。